



立西巻き

尼崎市立立花西小学校
校長 笠井美香
2025. 9. 24 (水)
No.31

[校長先生つぶやき、つぶやく（校長だより）]

一日、7分から8分

私達教師は、「教職員としての基本姿勢に関する分野」「学校課題に照らし合わせた分野」「皆が学びたい分野」など、自身が必要とする学びや学びたいこと、経験年数等にあわせた研修を年間通して受けています。

先日は、校内で、カウンセリング研修を実施しました。本校にも、スクールカウンセラーがひと月に一日配置されています。（必要度から考えると、1週間に一日いてもらえると、さらに安心なのですが・・・）

さて、「カウンセリング・マインド」という言葉をよく耳にしますが、おそらく、私自身に一番足りないのは、このマインドではないかと、自分自身の言動で思うことがあります。特に、家族に対しては、まったくと言っていいほど、このマインド不足で過ごしてきたように思います。学校の子ども達に対しては、できるこのマインドも、我が子に対しては・・・反省しきりです。



カウンセリング・マインド

相手の立場になって、気持ちや考えを共感的に理解しようとする心構え

この度の研修テーマは「子どもを勇気づけるには」でした。

心理学者アドラー先生が提唱する子育ての2つの目標である行動面の目標（①自立する ②社会と調和して暮らせる行動ができる）と心理面の目標（①私は能力がある ②人々は私の仲間だ）に対し、支援者自身がどのような態度でどのような声掛けをしていくことがよいのかの自己点検（自身の態度や言葉がけの在り方）について学びました。テーマにある「子どもを勇気づける」大人であるには、認める、褒める、価値づける、叱る・・・にしても、「そばにいる」ということが肝であるなどあらためて、感じたところです。毎日、見ていると、聞いていると、子どもががんばる姿やへこたれていることに気づきます。そのいざ、ここ、今という時に発する支援者の言葉は、そばにいて、いつも見ていてくれたからこそ、本物の勇気づけにもつながるのでしょうか。効果を発揮するのでしょうか。

ここで、少し計算してみました。私達、教員は、一日の全体時間で考えると、お家の方よりも時間長く子ども達と一緒にいるようにも思いますが、一学級35人6時間授業と考えた時、一人の子どもに対し、計算上は7～8分の時間しか関わることができず、ノートの○付けや文章表記での評価時間を計上しても約10分程度しかないことになります。単純計算ですが、この短い時間でも、子ども理解に努め、「子どもを勇気づける」チャンスは逃さない支援者でありたいと思ったところです。いずれにしても、子どもに一番近い存在である担任やお家の方々の言葉がけが「魔法の言葉」となり、支えとなることは間違いありません。忙しくても、タイミングよく、子どもの声に耳を傾ける余裕ある自分でありたいと考えます。夕方遅く、児童ホームへお迎えに来てくださるお家の方とお子さんが一緒に帰る姿を時折見かけ、その背中からはお疲れを察します。家へ帰ってからのドタバタも想像できます。「この後も、がんばって。」と応援ビームを送っています。困りも喜びも、共有、共感し共に一歩前へ進める学校でありたいと思っています。